

## 論文要旨

本論文の構成は、次のとおりである。

### 序章

#### 第Ⅰ部 概論

##### 第1章 近代日中語彙交流史概観

##### 第2章 近代和製医学用語概観

#### 第Ⅱ部 各論

##### 第3章 「結石」

##### 第4章 「瘧疾」

##### 第5章 「貧血」

##### 第6章 「心臓病」

### 終章

以下、各章の概要を述べる。

序章では、研究の目的、方法、研究背景、及び論文の構成を示した。

まず、本論文の研究目的は、近代和製医学用語について、その成立過程・理由を究明し、普及・定着した軌跡を確認し、中国への移入ルートや受容・定着の時期を明らかにしていくことだと述べた。次に、いくつかの先行研究を通して、「新漢語」の定義を整理し、本論文における「新漢語」の定義を、日中両言語における翻訳語のうち、日本語において蘭学伝来以降に成立した漢語、および、中国語において16世紀後半以降に成立した漢語とした。なお、両者を区別して呼ぶ場合、日本語における新漢語を「和製（新）漢語」と呼び、中国語における新漢語を「華製新漢語」と呼ぶことにした。最後に、近代和製医学用語の範囲（蘭学由来の医学用語と近代西洋医学翻訳語）を述べ、近代和製医学用語と日中語彙交流史の関係について簡単に説明した。

第1章と第2章では、近代日中語彙交流史と近代医学用語の日中語彙交流史について、第1期（16世紀後半～19世紀初頭）、第2期（19世紀初頭～1880年代）、第3期（1890年代～1920年）という3期に分けて概観した。

近代において、先に西洋科学技術に接触し、洋学書などを出版したのは中国であったが、禁教令や鎖国政策などによって、西洋知識の普及と発達が制限され、その結果、日本より近代化が遅れた。一方、日本は、江戸期に中国の前期洋学書、後期洋学書の影響を受けつつオランダ語を通じた蘭学から、独自に西洋科学が発展した。さらに明治に入って、多くの知識人が欧米から社会制度や技術などの様々な知識を吸収し、翻訳を行い、日本の近代化に寄与した。こうして、19世紀後期には、逆に中国が日本を通じて西洋知識を学ぶようになった。その結果、新しい概念を表す和製漢語が怒涛のように中国語へ流入してきた。

一方、医学においては、江戸期の日本医学に中国洋学書の影響はあったものの、蘭学から発展した蘭医学による訳語（特に解剖学用語）のほうが、むしろ日本の医学用語を主導したと思われる。また、明治期、英医学・ドイツ医学からの翻訳語も独自の造語であったため、中国医学用語が日本に与えた影響は少ないと思われる。

逆に、19世紀後期から、日本の医学用語が中国へ伝来した。現代中国の医学用語も、

ほぼ全面的に日本語に準拠している。これは、プロテスタント宣教師たちによる訳語が、和製漢語との競争に負けたことを意味し、そこには造語法及び造語自体の問題が存在したと考えられる。

第2章では、さらに、これまでの近代医学用語の研究を、①近代医学用語の創出の視点によるもの、②日中語彙交流・日中史的語彙対照の視点によるもの、③学術用語・専門用語の選定の視点によるものに分類し、簡単にまとめた。これまでの日中語彙交流視点からなされた医学用語の研究には、解剖学に関する用語が多かったが、本論文では、「MeSH (Medical Subject Headings) のカテゴリー」の「C 疾患」と分類される「結石」、「瘧疾」、「貧血」、「心臓病」を研究対象とし、次の第3章～第6章で語誌研究を行った。

第3章では、「結石」について考察した。「結石」は、江戸時代の蘭学者宇田川玄随がオランダ語「steen」の訳語としてつくった医学用語で、『本草綱目』の「淋石」、「癖石」の項目を参照してつくったものと思われる。

第4章では、「瘧疾」について考察した。「瘧疾」は、玄随の養子、宇田川玄真が、「ひきつる」を意味するオランダ語「kramp trekking」の訳語として創出した医学用語で、『金匱要略』の「瘧病」の項目を参照したと思われる。

「結石」と「瘧疾」は、いずれも英蘭辞書の系譜にある『改正増補英和对訳袖珍辞書』(1867)に収録されており、しだいに普及したようである。

第5章では、「貧血」について考察した。「貧血」は、桑田衡平が明治初年に、「anaemia」を訳す際に「貧血症」という語を創出したと思われる。ただし、「貧血」という形が初めて現れたのは、英和医学辞書の『医語類聚』(1872)である。

第6章では、「心臓病」について考察した。「心臓病」は、奥山虎章が『医語類聚』(1872)の「cardiopathia」を翻訳する際に造語した和製漢語だと思われる。

『医語類聚』は、明治初期、英語を学ぶ医学生が非常に愛用した辞書であったため、この2語の普及が促進されたと考えられる。

第3章～第6章においては、各語の中国における普及・定着についても述べた。中国においては、「結石」、「瘧疾」、「貧血」、「心臓病」は、1890年代～1910年代にかけて、英華辞典の編集(特に『顔惠慶英華大辞典』(1908))、清国政府の官員の報告、教科書の編訳、雑誌における日本小説の翻訳・重訳など、いくつかのルートによって中国に伝来、普及した。これらの語の中国語内における定着については、「結石」を除く、「瘧疾」、「貧血症」、「心臓病」がいずれも『辞源』初版(1915)に収録されており、後に「結石」、「瘧疾」、「貧血」、「心臓病」はすべて『辞海』初版(1936-1937)に収録されていることから、そのようすが知られる。また、1930年代からは、医学書に限らず、一般の書物、新聞、雑誌においても用例数が増え続けていることから、この時期に定着が進んだものと思われる。さらに、この4語は、20世紀初期の衛生学書・衛生学教科書の中にも多く出現している。当時の中国は、公共衛生の普及が行われたため、衛生学書・衛生学教科書は、多くの人々に読まれ、この4語もともに普及するようになったと考えられる。

終章では、本研究を通して明らかになったことについてまとめ、今後の課題について述べた。

本論文の研究対象である「結石」、「瘧疾」、「貧血」、「心臓病」は、いずれも、中国伝統医学(以下中医学)にその病気あるいは病状を表す用語があり、その一部は日本に伝わり、使用されていた。ただし、現代日本語にまで踏襲されず、上記の4つの用語に入れ替わ

った理由について、筆者は次のように考えている。

4つの用語が作られた根本的な原因は、西洋医学書を翻訳する際に、中医学の用語では正確に西洋医学の病気・病状が解釈・表現できなかったからである。つまり、それは、中医学と西洋医学の違いにあると思われる。

また、これらは、日本独自の翻訳語の作り方によって作られた新語である。その造語法は、次のようなものである。

①オランダ語より翻訳された医学用語「結石」、「瘰癧」は、原語をそのまま訳したものではなく、病理的に病気を理解したうえで、病因や病状などが提示できる漢字（「結」、「石」、「瘰」、「癧」）を語基にして組み合わせたものであると思われる。ただし、漢字の選定においては、やはり中医学書（『本草綱目』、『金匱要略』など）の影響を受けたと思われる。この2語は、意識という翻訳法に当たるとと思われる。

②英語より翻訳された医学用語である「貧血」、「心臓病」は、英語の語釈を日本語に訳し、それを漢字の語基（「貧」、「血」、「心臓」、「病」）に変換して組み合わせたものであると思われる。この2語は、直訳という翻訳法に当たるとと思われる。

また、中国において、宣教師の訳語が継承されず、ほとんど和製医学用語に入れ替わった理由について、筆者は、以下のように考えている。

①来華宣教師の訳語より、和製医学用語のほうが、西洋医学の概念をより正確に、かつわかりやすく示すことができたからである。

②大量の日本語翻訳が中国語に流れ込んできたため、それを使う人が増えたからである。また、本論文に出現している和製医学用語（「神経系」、「神経中枢」、「動脈」、「静脈」、「瘰癧」、「貧血症」、「心臓病」などの語）は、『辞源』（1915）に収録されているが、いずれも「日本由来」という注釈は見られない。ほかにも、多くの和製医学用語が今日の中国語に定着したのではないと思われるが、これについては、今後さらなる考察を通して、見ていく必要があると思う。